

町長

ひとりごと

(95)

齊藤

讓



バブル経済崩壊によって
はじまった不況は、ついに三十ヵ月に達した。これは戦後二番目に長い記録だという。政府はいろいろな経済指標を捉えて、景気は底を打ったとか、回復基調にあるとか発表をしているが、なかなかその実感を得られないのが現在の状況である。世界に目を向けても、アメリカは巨額な財政、貿易の双子の赤字を抱えて思うような経済対策の決め手を欠き、その不満が先の中間選挙にも大きく影響したといわれるように本格的な景気回復にはほど遠い状況のようであり、ヨーロッパ諸国も軒並み不況の渦中にある。ひとり活況をみせているのがアジア諸国といったところであるが、しかし、アジア諸国の経済規模は、

日本をはじめ先進諸国のそれと比較すれば、余りにも小さく、世界経済の復元を左右するまでには到底なっていない。さすれば、欧米諸国の鉦先は経済大国日本に向けられるのは当然であり、その構図が日米の経済協議に象徴されるような、日本の規制緩和を求める大合唱となつて現れてきているのである。

自由貿易体制に立国する日本は、その経済力からいっても、最早かたくなにこれを拒絶し、一国繁栄の夢を追い続けることはとうてい許されることではないだろう。従つて日本は、これまで構築してきた社会・産業の仕組を好むと好まざるにかかわらず、根本から組替えをしなければならなくなるのではなからうか。そしてその時期は、意外に早くやってくるのではない

かと思う。たいへんなことである。日本の現代社会は、長い歴史の中で、その風土と国民性の上に培われ、欧米諸国とは異つた独自の講義を持ち、それが国力の増進にも大きな役割を果たしてきた。この過程の中で幾多の社会的、産業的規制が生まれ、この保護の下で各産業がバランスを図り、高い雇用機会をつくり出し、世界に冠たる完全雇用体制を確立して国民の中流意識を確かなものにしてきたことは、誰もが認めるところであろう。いまこの日本の屋台骨が揺す振られているのである。

▼先日ある講演会で、講師がこんな話をした。日本の住宅建設費は、アメリカなどの外国と比較して二倍程度高い。その主たる原因は、日本は建築のあらゆる分野に厳しい規制があるため、多種類の職種を抱えていることによるものである。例えば、外国は一人の職人が電気・ガス・窓枠のはめ込みから何までもこなす多能

することをする著るしく困難にし、ひいてはコストの上昇をつくり出している。今後、外国企業による住宅建設等への参入問題は、避けては通れない焦眉の国際的課題になってきている。このことは、一面では国民により安い住宅を提供することになるのではあるから誠に結構なことではあるが、しかし反面ではたいへんな問題を孕んでいる。

日本の建設業は、雇大な雇用吸収の場となつていますが、もし、外国企業がここに上陸してきた場合には、はかりしれない打撃を受け、失業問題が一撥に火を吹く危険性がある。これは何も建設業に限ったことではなく、あらゆる産業種にも同様のことがいえる。そしてまた一方で、企業や資本が外国移転を加速させているのであるから、完全雇用の牙城は本丸攻めにあい、現在三パーセントにとどまっている失業率は、アツという間にヨーロッパの十パーセント並になることも決して無いとはいえない。今年の大学生の就職率が八十

かげの不況



パーセントに達しないという厳しい現象は、そんな将来を暗示しているような気がしてならない。こんな思いをしている折、タクシーに乗った。乗ると間もなく、運転手さんの方から話しかけてきた。「不景気で困りますよ、今は飲み屋さんの方からの声はほとんどありません。飲み屋さんも暇なんでしょう。私ら駅で一時間待つてようやくお客さまを乗せたと思つたら近くの病院、これが三時間で三回続くこともあります。三回の水揚げが千円では私の手元に四百円しか入りません。押えようと思つても、ついこんなお客さんには不愛想になつてしまいます。申し訳ないけど私にも生活がかかっていますから。」

身につまされる話である。長引く不況は、いま国民に暗くて重苦しい深刻な陰を落している。